

PART 1

私とキング 私のキング

ホラーというジャンルを超え、
キングの作品は多くの創造者たちを刺激し続ける。
彼らは、キングの何を血肉として、自分の世界を紡ぎあげていくのか？

世界を壊し、 創造し続ける小説家

浦沢直樹 (漫画家)

漫画界随一のキング通で知られる浦沢直樹。
キング同様、世界中に読者を持つストーリーテラーである
浦沢は、キング作品とどのように出会い、
どんなところに魅力を感じ、どのように影響されたのか——。
これまでの作家生活を振り返りながら語ってくれた。

キングとの出会いは一七歳のときに『キャリー』(一九七七年)を、二〇歳で『シャイニング』(一九八〇年)をロードショーで観たとき。うつつらと「ステイヴン・キングという人が原作を書いているらしい」と頭に残っていたんですね。でも実際に小説を手にとることはありませんでした。

そんなこんなで僕自身も一九八二年に小学館の新人コミック大賞に入選しまして、漫画家の道を歩み出したのですが、デビュー当時、自作だけでは食っていけないので、ある漫画家さんのアシスタントをやっていました。八三年のことですね。その仕事への通勤電車のなかで読む本を探すべく、地元の駅前書店に入ったんです。いろいろ探すなかで、セントバーナードのどアップの表紙カバー、「犬が襲う！」みたいな帯コピーがふと目にとまり、なんだこれはと手に取ったのがキングの『クージー』です。それが小説作品では最初なんですよ。

大友克洋との同時代性

まさかとは思ったんですが、裏表紙のあらすじを読んでもやはりセントバーナードが人を襲う話らしい。そんな設定で恐怖小説になるのかと思いつきながら、アシスタント仲間と「セントバーナードが怖いらしいんだよ、これ」「なんですか、それ」といった会話を交わしたのを覚えてます。で、これが読み進めていくとべらぼうに怖く、そしてとてつもなく面白い。
これはすごいぞと周りの人たちにも薦めつつ、キングのほかの作品も読もうと思ったら、その



クージーと名付けられた犬を愛するキング。©Alamy Stock Photo/amanaimages

当時『シャイニング』は絶版なかで入手不可だったの、当時手に入る『ファイアスターター』を読んだんですね。それでいよいよぶつ飛ばされちゃったんですよ。
その『ファイアスターター』から遡ること三年ほど前、もう一つ大きな衝撃を受けたのが大友克洋さんの『童夢』で、『ファイアスターター』

と同じように、超能力者の少女が出てきます。日米で同時に同じモチーフのすごい作品が現れたことに驚愕して、「どちらかがどちらかを知って書いてるんじゃないよな」と出版時期を調べたりもしました。もちろんそんなことはなく、この世界を独自のアンゲルで切り取るうとしている作家たちが、同時代に同じような作品を生